

今、私にできること

小川奈央美

東京都・一八・高校生

あなたと一緒にに行けると思ってた楽しみにしていた海の近くの喫茶店でこの手紙を書いているところです。伊豆はとってもいいところですね。あなたが言っていたとおりです。

この喫茶店を見つける前に一人で海辺を歩いていたら、一組のカップルが私の目の前を通りすぎていきました。少し泣いちゃいました――。

でも、波の音をしばらく聞いていたら少し優しい気持ちになれたかも。東京に帰ってもあなたにふくれた顔を見せずにすみそうです。

そういえば私があなたと笑いあったり、なぐさめたり、頼ったりするようになって、最初に「手紙」をくれたのはあなたでした。決して軟派じゃないあなたの手紙がいろいろな手紙の中に混ざってポストの中に入っていたのを見つけた時はびっくりしたけど、手紙を読み終った後にあなたから幸せを文字一つひとつからもらいました。

――こんなこと手紙でしか言えないよね。だから手紙って好き。言葉って便利だけど時には自分の気づかないうちに人を傷つけるものと化してしまう。だけどあなたはそれでもいいと言ってくれた。あなたは私の憧れの人だったから私はあなたに対して言葉を選びながら接していた。それをあなたは叱ってくれた。それも真剣に。そして私は素直になれた。――あなたが愛を分けてくれたから。――あなたはみんなを幸せにしてくれる存在なんだよ、きっと。

あなたのことを考えていたらあなたに逢いたくなりました。月曜日あなたに会っていつもより強く抱きしめて何も言わずに抱きしめかえしてね。

知ってますか？ これって小さい頃読んだ本に書いてあったんだけどちょっとした素敵なお話なの。月曜日の朝抱きしめ合った二人は神様にいつまでも守られるんだって――。

*離れてみて大切なものは何かを再確認することができました。